令和６年度　第２回周南市総合教育会議　会議録

１　日　　時　令和７年３月１２日（水）
　　開会：１３時３０分　　閉会：１５時００分
２　場　　所　周南市岐山通１丁目１番地　周南市役所　庁議室
３　出席委員　藤井律子市長　　厚東和彦教育長　　松田福美委員
　　片山研治委員　　岡寺政幸委員　　吉本妙子委員
４　事　務　局　教育部長　教育部次長（教育政策課長）　生涯学習課長
　　人権教育課長　学校教育課長　学校教育課主幹
　　学校給食課長　中央図書館長　企画部次長（企画課長）
５　書　　記　教育政策課（課長補佐　教育政策担当係長）
６　協議事項　以下の通り要約して記載

（1）　協議内容の説明

発言者	発言内容（要約）
事務局	本日の議題は、 「第３期教育大綱の策定について」と 「こどもまんなか教育を実現するためには～不登校の現状から考える～」 の２つ。 議題１については、市長、教育長、教育委員で協議を重ね、その他教育委員会が所管する団体等からもご意見をいただきながら第３期教育大綱を作成した。 本日はパブリックコメントを受けての修正等を報告し、最終的に決定としたい。 議題２の「こどもまんなか教育を実現するために～不登校の現状から考える～」は、第３期教育大綱の基本理念の実現に向けて取り組むという側面を踏まえて意見交換をお願いしたい。

（2）　協議内容

発言者	発言内容（要約）
市長	**【進行】** 第３期教育大綱は今後５年間、周南市の教育の羅針盤となるもの。 まちづくり総合計画との整合を図りながら、教育委員や教育委員会各課の関係する団体等のご意見も取り入れて素案を完成させ、パブリックコメントで市民の方々のご意見をいただき、このたび策定を迎えることができた。 まずは事務局から説明をお願いする。

発言者	発言内容（要約）
教育部 次長 （教育政策課長）	**【議題１説明】** 第３期教育大綱策定までの経緯と、パブリックコメントを受けての修正等の報告を説明する。 これまでの経緯は教育委員会内での複数回にわたる協議、昨年９月の総合教育会議、総合教育会議とは別に、市長と教育委員との意見交換の場など協議を重ね、新たな基本理念と基本理念を支える３本柱となる基本方針を決定。 第３期周南市教育大綱の基本理念は **未来を生き抜くこどものための** **興味・楽しさ・勇気を育む** **こどもまんなか教育** とし、教育委員会としてこどもまんなかに取組む姿勢を表している。 この基本理念は、これからよりよい社会を作り上げていく今のこどものために、興味で目を輝かせ、楽しさを見つけ、進みたい道を歩める勇気を培うことができるような教育環境を学校、家庭、地域が一体となって作り上げていく、それが周南市の掲げるこどもまんなか教育であるという意味を込めている。 基本理念の実現を支える基本方針は、 **基本方針１：未来に繋がる学びがあふれる学校をめざして** **基本方針２：未来を生き抜くこどもを　ともに育てる学校・家庭・地域をめざして** **基本方針３：誰もがワクワク学び、いきいき活躍できる生涯学習社会をめざして** の３つとし、全ての市民に対する教育を網羅している。 その基本方針に沿って１２の推進方向を定め、素案としてまとめ、昨年１２月２７日から本年１月２７日までパブリックコメントを実施。 意見の提出者は２名で意見の項目総数は１１件で、うち２件を反映して素案を修正。 １件目は、年代記述が元号・西暦と混在しているものを、原則元号西暦併記に統一。 ２件目は、アンケート方法の対象者選定方法と依頼方法を教育大綱本編及び資料編に追記。 １１件の意見に対する市の考え方は、２月２７日より市ホームページなどで公表している。

発言者	発言内容（要約）
教育長	**【補足説明】** 今回の教育大綱策定にあたり、多大なるご協力をいただき、改めて感謝申し上げたい。 今回の教育大綱は、こどもが育まれる場である学校・家庭・地域の３者が教育における信頼のトライアングルで繋がりながら、その中心にこどもを置いて、学校・家庭・地域それぞれがそれぞれの役割を果たしていくということを大切にしようということをベースとしている。 未来を担う人材として、こどもをまんなかに据えた教育が展開されるよう、教育委員会各課で様々な施策を展開してまいりたい。
市長	**【進行】** この教育大綱の基本理念を作るために、総合教育会議でなく、別に審議する場も設けていただいて、このような立派な理念ができて本当に嬉しく思う。 今後５年間本市の教育が進むべき方向性、また基本理念の実現に向けての施策等を総合的に示した第３期教育大綱を、皆さんと思いを一つにして策定できたと思っている。 本大綱につきましてはホームページ等でも市民の皆様に周知していく。 大綱に関しては完成ということでよろしいか。
教育委員全員	**【意見】** 異議なし。
教育部次長（教育政策課長）	**【議題２説明】** 児童生徒が生き抜く力を育む場として学校は大変重要な場所だが、様々な要因で登校の児童生徒が全国的に増加しており、周南市も例外ではない。 第３期教育大綱の基本理念の実現に向け、不登校問題という側面を踏まえて、学校教育について意見交換をしていただきたい。 まず学校教育課から周南市の不登校の現状等について説明をさせていただく。
学校教育課長	**【説明】** ■　文部科学省が策定したCOCOLOプランについて 不登校児童生徒とは、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因背景により児童生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるために、年間３０日以上の欠席をした者のうち、病気や経済的理由によ

発言者	発言内容（要約）
	る者を除いた者と定義されている。 　文部科学省では不登校児童生徒が増加し続けている現状を踏まえ、誰 1 人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策として、この COCOLO プランを令和 5 年 3 月に策定。 　このプランでは不登校により学びにアクセスできない子供たちをゼロにする、これを基本に、不登校児童生徒全ての学びの場を確保し、 　① 学びたいと思ったときに学べる環境を整えること 　② 心の小さな SOS を見逃さず、チーム学校を支援すること 　③ 学校の風土の見える化を通じて学校をみんなが安心して学べる場所にすること の三つを目標に掲げ、こども政策の司令塔であるこども家庭庁とも連携をしながら取り組みを進めていくこととされている。 ■　本市における不登校対策 　学校における対策としては、連続して欠席する児童生徒への電話連絡や家庭訪問を行い、連続欠席が 3 日を超えた場合は学校でケース会議を実施するなどを行っている。 　周南市教育委員会の対応としては、教育支援センターに指導員 5 名を配置し、学校とともに不登校児童生徒の対応にあたり、専門家として、スクールソーシャルワーカー 7 名、スクールカウンセラー 1 名を配置し、児童生徒の心のケアや環境への働きかけを行い諸課題の早期解決を図っている。 　不登校対策は、様々な機関と連携することが必要で、市長部局のあんしん子育て推進課や、児童相談所や警察などとも連携をとりながら、家庭だけではサポートすることが難しい家庭環境への支援を行っている。 　また地域福祉課では主にひきこもり対策事業を行っており、保護者の会を開催するなどの支援を行っていることから、不登校児童生徒の卒業後の社会的自立に向けて連携を図る必要があると考えている。 ■　山口県教育委員会の不登校対策 　主な事業としては、スクールカウンセラーの配置に関する事業、それから、ステップアップルームの設置に関する事業がある。 　これらの事業を受け、本市では、スクールカウンセラー

発言者	発言内容（要約）
	１３名を全中学校区に配置するとともに、3校、具体的には、太華中学校・住吉中学校・富田中学校にステップアップルームを設置し、教室に入ることのできない児童生徒の学びの場を確保することなどに努めている。 近年、児童生徒を取り巻く環境は変化しており、事態が複雑化し長期間にわたって支援が必要となるケースも多いことから、これまで以上に市全体で不登校対策に取り組んでいく必要がある。 このように国、県、市が様々な不登校対策を進めてきたが、全国の不登校児童生徒数の数は増加の傾向が続いており、本市も同様の傾向が見られる。 ■　本市の不登校児童生徒の増加傾向とその要因 本市の不登校児童生徒の推移として、令和２年度と令和5年度を比較すると、小中学校合わせて１４０名増加している。 また１，０００人あたりの出現率も令和２年度と５年度で比較すると、小学校で１２．４人の増加、中学校で１９．５人の増加という傾向が見られる。 ただし、周南市における児童生徒１，０００人あたりの出現率は小学校２０．８人、中学校５６．４人となっており、この数値は、県および全国の数値は下回っており、取り組みが一定の成果を上げている。 また、学校に行くことができない要因として考えられるのは以下のとおり。 ● 人間関係 ● 家庭生活等で不安やプレッシャーを感じ、登校への意欲が失われる、 ● ゲームやＳＮＳ等のメディア依存による生活リズムの不調 これらの要因によるケースについては、保護者の協力を得ることが不可欠。 一方、 ● 授業の内容が分からない ● 宿題をこなすことが難しいといった学校生活そのもの など、学習面に原因がある不登校が依然として多いことも推測される。 この学習面での悩みというのは学校に来ている児童生徒にも共通している悩みであり、学校生活を楽しいと感じ

発言者	発言内容（要約）
	ることができない要素になっていることも考えられる。 学校になかなか気持ちを向けることができない不登校児童生徒にとって少しでも関心を持ってもらえるような学校とはどのような学校なのか、あるいは、今は学校に来ることができている児童生徒にとって、より楽しいと感じることができる学校とはどのような学校なのか、その解決策を考えるためには、児童生徒の実際の声を聞くことが大切。 ■　教育大綱アンケートの実施結果から読み取れる現状 第３期教育大綱策定の基礎資料とするために市内の小学校５年生と中学２年生を対象として、教育に関するアンケートを実施。 アンケート項目の一つとして、毎日の学校生活で一番楽しいと思う活動を一つ選んで回答していただいた結果、小学校５年生は約半数の児童が休み時間が一番楽しい時間と回答し、行事の時間がそれに続いて楽しいと感じる時間として選ばれており、中学２年生も小学５年生とほぼ同じ結果。 小学生・中学生共に、約９５％以上の児童生徒が学校生活の中で楽しいと感じる場面があるということがわかる一方、楽しいと感じるときがないと回答した児童生徒が、一定数存在するということに学校教育課としては危機感を抱いている。 また、楽しいと感じるときとして授業時間を選んだ児童生徒が小学校年生で４％、中学２年生は２％、という低い結果となっていることについても、課題意識を持っている。 学校で過ごす時間の大部分を占めているのが授業で、授業はできること、わかることを増やし、自分の良さや可能性を発見する場であるとともに、異なる考えを持った他者と交流しながら多様な人や物の存在に気付く場でもある。 日々の授業を楽しいと感じてもらえるようにすることが学校教育を見直す際の大切なポイントになると感じている。 学校教育課では、全ての児童生徒が学校で豊かな生活を送り、安心して教育を受けられるよう、適切な環境を確保していくことが必要だと考えている。 この思いから、教育大綱の成果指標には全国学力学習状況調査の児童生徒への質問の中から、学校に行くのは楽し

発言者	発言内容（要約）
	いと思う児童生徒の割合を掲げた。 　不登校児童生徒が増加している現状の中で、こども自身が自己有用感を持つことができ、自分らしさを表現できる魅力ある学校づくりをいま一度しっかりと考える必要がある。 　今後も学校に行くのが楽しい思う児童生徒が増えていくよう、こどもまんなか教育の実現に取り組んでまいりたい。
教育長	【補足説明】 ■　誰一人取り残さない魅力ある学校をめざして 　現在の取組みを継続していくだけでなく、不登校で学校に通えていない児童生徒も含めて、全ての児童生徒にとって学校という学びの場が興味・楽しさ・勇気を育む大切な魅力のある場となることが、誰一人取り残さない教育に繋がっていく。 　今回策定した教育大綱に基づき、こどもをまんなかに据えた教育を展開し、誰一人取り残さない、魅力のある学校にしていきたいと強く思っている。
市長	【進行】 ■　授業を通じて学ぶ楽しさと意欲を育む 　先ほど説明で示された不登校児童と生徒の声の中に、学校生活にやる気が出ない、授業内容が分からないという声があったが、1日の大半を過ごす学校生活において、そのほとんどが授業時間である。 　一人一人の児童生徒にとって興味が喚起され、新たな知識や技能を学ぶ楽しさが感じられる場であると同時に、学び続けようとする意欲を育む場であっても欲しい。 　教育委員のみなさんはどう考えておられるか、学校訪問の感想もあわせながらご意見をお聞かせいただきたい。
片山委員	【意見】 ■　アンケート結果からみる現状と授業改善の方向性 　アンケート回答で一番気になったのが、学校生活の中で一番楽しいと思う時間で、授業時間の回答が少ないこと。 　不登校対策としては予算や人員が投入され一定の効果が出ていると思う。 　不登校の原因は、小さい時からの親子関係とか、様々な要因があるかと思う。

発言者	発言内容（要約）
	学校に行くのは学びに行くことが大前提なので、その中で興味・楽しさ・勇気を育む学びがあれば、自ら学びたいという気持ちに繋がっていく。 学校訪問においても、タブレットを使ったり、生成 AI を使ったり、授業の雰囲気はすごい楽しくやってるのが分かる。 しかし、アンケート結果からは、授業の質の改善にはまだ余地があると考えられる。 こどもたちが、もっとやってみたいと挑戦していけるような授業であれば、こどもたちが生きていく力の育成に繋がるのではないかと思う。
吉本委員	【意見】 ■　学校は人間の基礎を作る場であり、感動が学ぶ意欲につながる 人間の基礎を作るのが学校であり、特に小学校は基礎を作るための重要な場所。 学ぶ意欲は感動から生まれてくる。 こどもにとっては学校が全てで、学校の中で関わる人が多ければ多いほど感動する場面は増える。 学校・家庭・地域がこどもをまんなかに据え、協力してこどもを育てていくということは、もっとたくさんの方が学校に関わっていく結果として、学びの楽しさが育まれる。 生成 AI のモデル校になっている岐陽中学校の授業を見せていただき、とても感動した。 そのような授業に学ぶ意欲や、楽しさの要素があり、個別最適化に向けて学び方が多様になっていると思いワクワクした。
岡寺委員	**【意見】** ■　楽しさ溢れる最先端の授業 私も生成 AI の授業を見た時に、今まさに過渡期で授業が面白くなってる途中だということを広く伝えたいと思った。 AI だけではなく学校見学の際に実際の色々な取組を見て、とても楽しそうにやっていると感じた。 ■　ふるさとを意識した学びが重要 また、小学校・中学校の学びといえば、私はふるさとの育成だと思っている。 地域や親元を離れてから一番大事になってくるので、そ

発言者	発言内容（要約）
	の意味では今回の教育大綱に掲げた興味・楽しさ・勇気を育むというのは本当にイメージしやすくて、すごく良いと思う。 　興味をもたせよう、楽しく学ばせよう、優しさも含めた勇気を持って、様々なことに取組んでもらえたら嬉しい。 　児童生徒の時期がすごく大事だということがこの大綱でしっかりフォローできて、これからみんなでバックアップできるのではないかと思う。 ■　不登校対策として地域による見守りも重要 　不登校の件でも、現実に学校にこどもを通わせている保護者の話では「楽しく行っている」という子がほとんどだが、中には「なかなか行きたがらない」と言う方もおられる、親としてはすごく心配なのに実際に共有する機会がない。 　地域や学校運営協議会でそのようなことを共有する機会を設けることが出来たら、地域の方にも、もっと見守っていただけるのではないか。 　せっかく新しい教育大綱ができたので、こどもたちをまんなかに、周南市はこどもたちのふるさとをつくるためにみんなで関わって自分事にしていこうという取組ができたらいいと思う。 ■　教育に関する取組はもっと宣伝が必要 　今後は取組をもっと積極的にアピールしてほしい。 　先ほどの AI の件も、私たちは見学させてもらったので分かるが、地域の人たちはまだまだ知らない方も多い。 　しっかり宣伝していただき、取組に興味を持ってもらうことが大事。
松田委員	**【意見】** ■　こどもまんなか教育の重要性 　教育大綱の基本理念で「こどもまんなか教育」という言葉が登場したとき、とても嬉しかった。 　こどもが主体となる教育の重要性が改めて認識され、共通の意識を持てることを実感した。 　小・中学校の授業では、本来こどもが主語であるべきだが、教員は「何かをさせよう」「何かを育てよう」と考えがちで、つい干渉しすぎてしまうことがある。授業づくりにおいて、こども自身が楽しく学び、興味や勇気を持てる環境を整えることが大人の役割ではないかと考える。 ■　②　個別最適な学びの推進

発言者	発言内容（要約）
	現在、タブレットを活用した個別最適な学びが進んでいる。例えば、岐陽中学校では、生徒が生成 AI を活用し、対話を通じて学びを深める取り組みを行っている。AI が問いを投げかけることで、生徒は自分の考えを整理し、主体的に学習を進められる。 また、市内の小学校では、自由進度学習を導入し、こどもが自分のペースで学べる環境を整えている。従来のように一律の学習ではなく、こどもそれぞれの興味や理解度に応じた学び方が実現されつつある。 ■　教員の負担と学習環境の課題 個別最適な学びを進めるには、こどもに任せるだけではなく、力をつけるための仕組みを整える必要がある。 ３５人のクラスで全員に最適な学びを提供するためには、従来のグループ学習では不十分であり、タブレットを活用するなどの工夫が求められるが、教員の負担も大きく、授業準備のための時間が十分に確保されていない。 教員は、授業以外の業務にも追われており、6 時間分の個別最適な授業を設計するのは現実的に難しい。したがって、教員が工夫する時間を確保するための環境整備が必要だと考える。 ■　学校の取組を周知していく必要がある 市内の学校では、道徳の授業に地域住民を招き、生徒と大人が対話する場を設けるなどの工夫も行われている。 また、不登校のこどもへの支援として、家庭学習を負担に感じないように、学校で学んだことを自分で追求できる仕組みを研究している学校もある。 こうした取り組みは、実際に成果を上げているが、教員向けの資料にとどまり、広く共有されていないのが課題である。こどもまんなか教育をより充実させるために、成功事例を広く発信し、教育現場全体で取り組みを共有することが重要ではないかと考える。
教育長	**【意見】** ■　児童生徒が自ら学ぶ環境を整えることの重要性 自分が以前から考えていたことが、今回の意見交換の中で多く出てきたと感じる。最近、新聞で「こどもに教えるのではなく、自ら学ぶ環境を作るのが大人の役割」と書かれていたが、今回の教育大綱の基本理念も、その本質にあるのではないかと思う。 学校や教員として、どのような環境を整えれば、こども

発言者	発言内容（要約）
	たちが自分で興味・楽しさ・勇気を見つけ、学び続ける意欲につながるのかを真剣に考えながら、これからの授業作りをしていかなければならない。 ■　こどもと向き合わない時間も教員には必要 　松田委員の発言にもあったように、教員には学びの環境を整えるための時間の確保が必要である。 　現在こどもと向き合う時間の確保がよく言われるが、実際には、こどもと向き合わない時間も必要。 　準備や振り返りの時間を確保することで、最終的にこどもと向き合う時間がより充実したものになる。そのため、こどもと向き合わない時間を確保することも、教育の質を高める重要な要素だと実感した。 ■　宿題の意義を見直し、次の学びにつなげていく 　宿題については、学校の先生の反省点として、やったかどうかのチェックに終わってしまうケースが多い。その結果、こどもたちは宿題を義務としてこなすだけになり、次の学びにつながらないことが課題となっている。 　宿題をしっかり頑張ったこどもが、ただ先生に OK をもらうだけで終わるのではなく、この学びが次のどこにつながるのかを意識できるような宿題にしていくことが大切だと考える。そのため、学校でもこの点について話し合っていきたい。
市長	**【感想・進行】** ■　感想 　松田委員が「ゆとり」という言葉を言われたが、先生方に心の余裕とか時間的な余裕がもう少しあれば状況も変わるかもしれないと思う。 　児童生徒にとって興味や学ぶ楽しさが感じられる魅力ある授業となることを願っている。 　次に別の視点から意見交換をお願いしたい。 　先ほどのアンケート結果によると児童生徒の 9 割以上が、集団生活や友人と過ごす時間、皆で協力して取り組む時間などを学校生活において楽しいと感じる瞬間があるという結果が示されていた。 　一方、不登校児童生徒の声として、学校での集団生活や人間関係に馴染むことができないという声があると紹介もされた。

発言者	発言内容（要約）
	■　学校は様々な人との関わりから学び、生き抜く力の基礎を育む場 　人は様々な人と社会を形成して生きており、他人とは意見や考え方に違いがあって当然であり、人との関わり合いの中でしか学べないこともたくさんある。 　学校は様々な活動を通して、人と関わることが自然に出来る場であり、学校こそが生き抜く力の基礎が育まれる場ではないかと思う。 　現代は直接的でなくとも様々な手法で人との関わりができる社会になっているため余計にそう思うのかもしれないが、皆さんはどういうふうに思われてるかお聞かせいただきたい。
片山委員	**【意見】** ■　地域との関わりがこどもたちの学びを広げる 　地域との関わりが深まることで、こどもたちの学びに発展性が生まれると感じる。例えば、鹿野ではコミュニティスクールの取り組みの一環として、地域の歴史をこどもたちに伝える機会があった。 　私も学校を訪れ、小学生に「昔の鹿野の街並み」について話をしたことがある。その際、こどもたちは親世代よりも前の時代の話に興味を持ち、目を輝かせて聞いてくれた。こうした地域の歴史や文化を知ることが、ふるさとへの愛着を育むきっかけになる。 ■　伝統文化を守り、ふるさとを大切にする心を育てる 　ふるさとの大切さは、地域の伝統や文化を守ることにもつながる。例えば、鹿野ではかつて 7 月 31 日に「天神祭」という伝統行事があり、こどもたちが大きな太鼓を引いて歩く風景があった。また、和田地域には「三作神楽」などの伝統文化が今も残っている。 　地域の人がこどもたちに伝統を伝えていくことが、その地域の強みとなり、こどもたちが故郷を思い出す際の支えになる。学校に地域の人が関わり、授業だけでなく伝統文化を学ぶ機会を持つことで、「ふるさとを大切にしたい」という気持ちが育つのではないか。 ■　帰れる場所があるという安心感の大切さ 　人生の中でさまざまな経験をしていく中で、「自分はいつでもここに帰れるんだ」という思いを持つことは、こどもたちにとって大きな支えになる。 　地域とのつながりを強めることは、こどもたちにとっ

発言者	発言内容（要約）
	ての心の拠り所を作ることにもつながる。 ■　幼児教育の重要性と子育ての楽しさを実感できる環境づくり 　特に、幼児教育の環境を整えることは非常に重要だと考える。地域にはさまざまなサークルや子育て支援の活動があるが、これらをもっと活用できる環境を整えることで、子育ては大変だけど楽しいと実感できるようになる。 　親が子育ての楽しさを感じることで、こどもたちも楽しく過ごせるようになる。親が楽しみながら子育てをすることこそ、こどもたちの健やかな成長につながるのではないか。
市長	**【感想・進行】** ■　鹿野地区の温かい子育て文化 　子育てが楽しいと言われていたそのおかげか、鹿野地区は、3人4人5人こどもさんがいらっしゃる家庭が多い。 　地域が、こどもが産まれて、子育てが楽しいと思えるような。温かい子育て文化を作ってくださってるんだろうといつも思う。
吉本委員	**【意見】** ■　学校は人間の基礎を作る場である 　学校は人間の基礎を作る場所で、低学年では係、高学年では委員会や生徒会、他にも給食当番などの役割がそれぞれ公平に与えられる場があり、世界的には非常に珍しいと言われ、日本の小学校を題材としたドキュメンタリー映画で賞をとられたこともあるように、日本の小学校の学校生活のあり方というのは非常に素晴らしいと言われている。 ■　自分の役割を果たし、積み重ねていくことが自信につながる 　私たちは当然普通のことだと思っていたが、もしかしたら勉強が苦手な子も自分の役割を全うすることで、自信がつき、今後自分の中で興味がわくきっかけに結びついていくのではないかと思っている。 　そのような小さな自信の積み重ねが、生き抜く力が育まれていくのではないかと思う。 ■　習慣化とその積み重ねが生き抜く力を育む 　自信を持ちなさいという言葉は非常に簡単だが、自信を持つためには、小さいことを習慣化して、少しずつでき

発言者	発言内容（要約）
	るようになって、それが幾つも毎日毎日習慣化されてできることになっていくことが、結果として自信になっていくと思っている。 　それが、生き抜く力、人間の基礎となる部分を作っていくものではないかと思うので、もしかしたら不登校でも学習はタブレットで違う場所でできるかもしれないが、学校生活を営む中で、大人の人との触れ合いがあり、それぞれの係の役割を全うする中で育っていくものではないかと思う。 ■　役割の意味をこどもたち自身が考えることが重要 　私自身とこどもたちの小学校時代を振り返ると、当時は普通として当たり前だとやっていたことが、今では普通ではないという風潮になってきていて、普通とは何かと顧みた時、とても多様化していると感じるが、何のためにその役割があるのか、こどもが主語ということでいけば、こどもたちが自分たちで考えて役割を果たすには何が必要なのかというところから話していくのもいいのではないか。
市長	**【感想・進行】** ■　社会の縮図としての学校 　小さな自信の積み重ねが重要であり、社会を構成しているその社会の縮図が学校生活で、1人1人の役割はあって当然、家族にあっても役割あって当然で、それが大きくなって社会を形成するのであれば、学校は一番良い訓練の場でもある。
岡寺委員	**【意見】** ■　自主性を育むことが重要 　不登校の現状を踏まえ、生き抜く力を育む学校生活のあり方について考える中で、諦めない・くじけない気持ちが各自に備わり、自信を持つことが重要だと感じた。 　そのためには、自主性を育むことが必要であり、どうすればそれを実現できるかを考える必要がある。 ■　学校・家庭・地域で共通の意識を持って取組む 　また、親・地域・先生など教育に関わる人たちが共通の意識を持ち、協力して取り組むことが不可欠であると再認識した。 　「ゆとり」を持つためには教員の増員や地域の協力の必要性など、いろいろなことを考えながらも、現状や努力を地域に理解してもらうことが大切。

発言者	発言内容（要約）
	■　地域との関わりがこどもの自信につながる 　また、こどもたちは地域の大人に褒められることで自信を持ち、生き生きとする姿をよく見かける。相手が先生だと関わり方によっては緊張する子もいるが、地域の第三者に褒められることで、新たな自信につながることもあると感じています。 ■　スクールカウンセラーの支援を周知する必要 　周南市ではスクールカウンセラーによる支援が他のまちより手厚いと伺ったが、現状として地域の人にはあまり知られていない。そのため、私たちも協力できることを考え、支援の存在や学校との関わり方を周知していくことが大切だと感じた。 　今回の議論で多くの気づきを得たので、持ち帰って今後の参考にしたい。
市長	**【感想・進行】** 　地域の一員として、日頃からの見守りに感謝している。 ■　褒める機会の重要性 　以前は小さな親切運動のような取組みがあり、社会の中でこどもが主体となり、褒められる機会も多かったが、今は減ってきているように思う。 　「この子は地域でこんな良いことをした」と皆で褒める機会をもっと増やすべき。 そうすれば、こどもたちの自信や、諦めず、くじけない力を育み、生き抜く力につながると感じた。
松田委員	**【意見】** ■　学校では褒める取組が実践されており、さらに発展させていくべき 　現在、学校では相手の良さを認めたり、褒めたりする取り組みが増えている。誰々がこんな親切をしてくれたといったことを表明する活動や、褒め言葉を掲示する取り組みもある。 　しかし、それを継続したり、より多くの場面で認める機会を設けたりすることが、さらに大切ではないかと感じる。 ■　地域や大人との関わりの重要性 　こどもが自信を持ち、生き抜く力を育むには、周囲の大人との関わりが大切。特に、地域の人々や支援員がこどもに声をかけ、認めることが重要。

発言者	発言内容（要約）
	■　学校には多くの支援者がおり、先生以外からも褒められる機会がある 　昔は先生が一人でこどもを支えていたが、今はスクールカウンセラーや SSW（スクールソーシャルワーカー）、業務支援員、介助員、生活指導員、図書館指導員など、多くの支援者が学校に関わっている。 　こどもたちは、先生以外の大人に褒められることで、新たな視点から認められる喜びを感じることができる。 ■　コロナ禍の影響とこどもが抱える不安の解消 　養護部会の先生によると、コロナ禍を経験したこどもたちは、対人関係やコミュニケーションに不安を感じやすいと言われている。そのため、大人が積極的に関わり、安心感を与えることが重要。 ■　ちょっとした関わりが大きな力になる 　例えば、朝、学校に行くのを渋るこどもに対し、先生以外の支援員が「おはよう」と声をかけるだけで、自然と教室に入れることもある。このような関わりが、こどもの安心感につながると感じる。
市長	**【意見】** ■　コロナ禍の影響と不登校のこどもたちの声を受け止めることの大切さ 　コロナの社会的影響は現在も続いており、その中で育ったこどもたちがどのように苦しんでいるのか、十分に理解されていない可能性がある。 　不登校について考えるとき、こどもたちがなぜ学校に行きたくないのか、なぜ家から出られないのか、その声を本気で聞いてくれる存在がいるかどうかが最も重要だと感じる。 　学校の先生や家族など、こどもに関わる大人は多くいるが、こどもが包み隠さず本音を話せて、一緒に解決へ向かってくれる人の存在が不可欠である。
松田委員	**【意見】** ■　不登校のこどもと保護者を支えるための継続的な寄り添いの必要性 　不登校のこどもを抱える保護者は、毎日終わりの見えない状況の中で子育てを続けており、その負担は計り知れない。 　支援する側も、一度の関わりでは解決が難しく、長時間関われば良いというものでもない。大切なのは、適切なタ

発言者	発言内容（要約）
	イミングを見ながら継続的に寄り添い、悩みを聞き、共感してくれる存在がいることであり、これがこどもに大きな影響を与える。 　現在、学校や保健師などの専門家も支援を行っているが、一つのケースに長時間関わることが難しいという課題がある。この仕組みを改善し、より継続的な支援ができる体制を整える必要があると感じている。
市長	【意見】 ■　多様な人との関わりがこどもたちに与える力 　学校では、相談員をはじめ多くの大人が関わることで、こどもたちは自然と人と触れ合い、関係を深めていく機会を得る。 　挨拶のやりとりの中にも、そうした関係が築かれる可能性があり、どれほど関わりを持つことができるかは未知数だが、その関わりが大きな力になると考えられる。 　そのため、できるだけ多くの人にこどもたちを応援してもらいながら、学校がこどもたちにとって安心できる場となることが大切だと感じている。
松田委員	【意見】 ■　支援体制の充実とその課題 　現在、市では多くの連絡協議会を活用し、情報交換を活発に行うことで、多様な支援者が関われる仕組みを整えている。 　スクールカウンセラーや保健師などの専門家が情報を共有しながら、こどもたちの実態を把握し、適切な対応を進めていることは、学校にとって大変ありがたい。 　しかし、支援体制がフル稼働している中で、すでに手一杯の状況になっている点が懸念されるため、さらなる改善が求められる。
教育長	【まとめ】 ■　学校の集団における人との関わり方の難しさ 　授業のあり方や、今回のもう一つのテーマである集団との関わりについて、現在、取組みは進んでいるが、改めて「どのように進めていくべきか」を考え直す必要があるとも感じた。 　大人との関わりが多いこどもの中には、自立が難しくなり、同世代との関わりが苦手になってしまうケースがあると聞いたことがある。その結果、学校から離れてしまうこどももいるため、この点も含めてしっかりと考えて

発言者	発言内容（要約）
	いきたい。 ■　こどもにとって大切なのは「誰と一緒にいるか」であり、地域との繋がりもそこで育まれる 　また、こどもが母親に「本を読んで」と頼むのは、単に本を読んでほしいのではなく、「一緒にいてほしい」という気持ちの表れであり、何を読んでくれたかよりも、「誰と一緒にいたか」をよく覚えている。 　このことは、地域の方々がこどもたちと関わることの大切さにもつながる。こどもたちは、地域の人と触れ合うことで、「自分たちを見守り、助けてくれる人がいる」という安心感を持つようになり、それが地域の継続や地域愛の醸成につながるという視点も大切にしたい。 ■　将来世代への責任あるまちづくり 　今後は第 3 期教育大綱に沿って新たな取り組みを進めていく。未来を担うこどもたちが、しっかりと基礎力を身につけ、生き抜く力を育むことは、まちづくり総合計画の基本理念である「将来世代へ責任あるまちづくり」や、「2050 年を乗り越える周南市になる」という市のパーパスとも深く関わっている。 　今のこどもたちが 10 年後、20 年後に活躍できるよう、しっかりと力をつけてもらうことが、将来世代への責任あるまちづくりにつながる。 　教育大綱を学校に説明する際には、市の基本理念やパーパスと関連づけながら、しっかりと周知していきたい。